

## ソーシャルワークの 座標

たなべ・ひでのり

“ケースの死 笑い飛ばして跡始末”、“金がない？それがどうしたこくんな”、“救急車 自分でよべよばかやろう”、“聞えるよ そんなにそばに来なくても”、“親身面本<sup>づら</sup>気じゃあたしゃ身がもたねえ”……

ことし（'93）6月中旬、各新聞に一せいに掲載された、おどろくべき川柳（？）の数々である。ケースワーカーたちの全国機関誌「公的扶助研究」に掲載されていたものだという。

その反響は大きく、間もなく掲載した機関誌は廃刊され、母体となった公的扶助研究会すら解散に追いこまれる。

もっとも内容をよく見ると、いいものもある。“ゆくたびに おなじ話にうなずいて”、“死んでやる わかっているもとんでゆき”、“暗くてはやってられないこの仕事”など。

しかし大半はケース（受給者）に冷たい気持が露骨に出たものが多いようだ。もともと、“第一回福祉川柳大賞”なるこの催しもの自体、真面目さを欠いた企画だったように思われる。“訪問日 ケース元気で留守がいい”が大賞をうけた句というだけでも、その空気を察することができよう。

### 出会ったよき友人——ケースワーカーたち

心が荒んでしまったワーカーは、まず本人が不幸だ。ついでに仕事を通じて、自分のまわりを暗くしている。

しかしそういうワーカーは、それほどざらにある例とは思えない。むしろ仕事を通じて出会った彼等は、仕事に生き甲斐を見出していた。そうでない場合について、後程その社会的原因を調べたいのだが、いまここで記憶に残

るワーカー人物像を描けば、仕事に前向きに取り組む姿が、共通に浮んでくる。

遙か以前、福祉興隆期に四国の山奥をともに歩いたNは、明るくひょうきんなところがあった。

予定のケース訪問を変更して、山奥にかくした重度の知的障害児を探しにかかったときも、彼は苦しめない。結果的には発見・専門施設へ措置入所というコースを辿ることができたのだが、探索は難航した。

探しあぐねて、山奥で日が暮れる。夏のことで、これは文字通り野宿と覚悟したときに、奇蹟的に古寺が見つかった。廃屋のように見えたが、ちゃんと住職が住んでいた。

破れ寺の二階、畳部屋に布団にくるまって寝れる。五衛門風呂に簡素な夕食、思いがけない幸せにめぐり合ったものだ。

夕食後、和尚さんが2階に上ってきた。若いもの二人のために、よい話を垂れるためである。延々2時間、なにしろ大事な宿主、われわれはかしこまって拝聴する。そのあととやっと寝れる。手足を長々と伸ばして、ああ安楽国と、聞きたての單語を呟く。

クーラーはないから、窓は開けはなしてある。やがて羽音とともに、虫が侵入しはじめた。その数と種類の多さにおどろき、公害と縁のない山奥のここに、世界中の虫が集合したように思う。

翌朝さわやかな顔をみせて、Nが言う。「昨晩は説教攻め、虫攻めでしたね」それでも健康体は、どちらも安眠を貪られたのだった。さあ行くか、きょうもケース訪ねて山道を、とともににっこりする。

彼女は一生専門職を、と思っていた。北九州市児童相談所（略して児相）で、児童福祉司、心理判定員を長年つとめるS。時代はぐっと現在時点にとぶが、Sの場合はソーシャルワーカーの部類にはいる。生涯その専門職のつもりでいたが、子供が大学卒の時期になって気持を変え、巾広い管理職をめざすこととした。難関の係長採用試験もパスして、現在八幡東福祉事務所の福祉係長の仕事を担当している。

筆者はSを、BPW北九州クラブ<sup>①</sup>のイベント“ハンサムに生きるあなたへのメッセージ<sup>②</sup>”のパネリストとして、はじめて話を聞く機会をもった。外の女性パネリストもそうだが、家事・育児と仕事を両立させ、意欲的な生き方に感銘する。それはごく一部の、仕事と生活に意欲を失った男性ワーカー

から見て、比較しようもない生の輝きである。

児相はよくそんな個性的ソーシャルワーカーをかかえる。また過去のことだ。指導員という職名の女性ソーシャルワーカーと、Hケースワーカー（中年男性）がいた。女性の方はかなり年輩で、それだけにいろんな職場に友人がいて、つまり顔が広い。

だから仕事上の、プライベートなミーティングをよく企画した。ワーカーの仕事を消化しながら、力あまって社会人のグループワーカー的存在になっていた。仕事好きの上に、社会のコミュニケーションづくりが好きらしい。日曜日に重度心身障害児の在宅訪問を企画したのも、彼女だ。専門チームを組織して、児相のライトバンでよく出かけた。筆者も参加したが、これがボランティアなのか、仕事の延長なのか分らないところが面白い。そのときの参加者の1人に、Hがいた。文字通り児相配属のケースワーカーである。ずっとケースワーカーをしていて、もう中年にさしかかろうとしていた。このまま引き続きワーカーをしたい、彼は本気でそう言った。現在は社会福祉士制度もできて、その国家試験に受ければ専門職たり得る。その当時は社会福祉主事の資格で事足りていたから、専門職のようで、資格上は一般職でしかない。それでもいいからケース担当の現業員でいたい、この仕事が好きだから。Hの心意気には感じたのだが、これらワーカー群像のすばらしさの中で、どうして少数でも冒頭紹介したような仕事にソッポを向いたワーカーが存在するのか。

## ラインとスタッフ

— 乱れの背後にあるもの

気持ちが仕事からソッポを向いている、そこには担当する仕事への誇りも、困難を乗り越える努力も感じられない。

乱れの背後にあるものとして、ライン一般に対する軽視がある。民間会社には見られないその傾向は、行政<sup>⑨</sup>に特有のものだ。

ラインとスタッフの関係は、普通考えられる以上に問題をはらんでいる。

言うまでもないことだが、ラインとは事業そのもの、スタッフはその援助組織である。民間会社でみれば、営業部門がラインで、人事・会計・庶務はスタッフということになる。両者が車の車輪の如くうまく協調して進行するとき、仕事は伸びる。

学校の場合も同様である。各教科を担当する教員はライン部門に属し、事務局はスタッフ部門、そして学長は普通スタッフと考えられる——学園全体の運営管理に関わるので。それでも学長職で授業も担当すれば、スタッフとラインを兼ねるハードな仕事に従事していることになる。

ラインとスタッフといっても、一般には地味なスタッフより事業そのものに直結するラインが好まれる傾向がある。その分りやすい例が、民間会社の場合だ。社員は営業というラインを、一般には好ましいと考える。なにしろ失敗の危険もあるが、やり甲斐のある部署と考えられている。営業部から総務部の人事、会計などに配置されると、これからは当分地味な裏方に徹して辛棒しなくては、という心情であろう。やがてまた華々しい表舞台の営業マンにカムバックする日を夢見ながら。人によって差はあるものの、一般的な気持ちはそのようなものであろう。

それが不思議なことに、行政組織では逆の評価が出てくる。ライン軽視、スタッフ重視という底に流れる心情は、是正しようと試みても無理な位に、脈々とひそかに流れている。

このことは、中央官庁組織でも地方自治体組織でも変わりなく、一様に底流として無視できない評価の流れを形作っている。

県庁に例をとれば、総務部とりわけ人事課・財政課は県庁マン等しく望む職場となっている。行政の場では、事業部門の裏方に当る部分がひとり歩きして、組織内の小さな権力者になってしまった。人事異動と予算の配分執行が、権力の源と化し、事業の実践（農林行政、民政・衛生・労働・土木等各行政）より優位に立つようになる。

それらを統括する長（この場合、知事）はいるのだが、ラインとスタッフのこのメンタルな関係は規程にあるわけではなく、殆んど見過されてしまう。そしてスタッフ優位の行政組織（中央官庁では大蔵省が尊重される）のありようでは、それぞれの事業部門（ライン）が伸び伸びと、仕事に誇りをもって、活潑な仕事を果すのに、ブレーキをかけマイナス要因となっている。

更に、ラインとスタッフ逆転現象の延長として、本庁対出先機関の問題がある。ここにも本庁優位、出先軽視の風潮が一部にせよ残存しているところが問題だ。

出先機関といわれるものは、住民に直結する重要なライン部門である。そこには、福祉事務所、保健所、県税事務所、土木事務所など、事業本位・仕

事本位の見れば、意欲をそそられる仕事が、目白押しである。民間会社に比すれば、花のライン部門、営業の第一線ということになる。

ソーシャルワーカー、ケースワーカーとしても、腕のふるいどころであろう。仕事に誇りとよろこびを見出すかぎり、一部の出先き軽視という、出世型行政マンの妄想をふきとばして、すばらしい仕事の醍醐味が味わえる。

そうでない悪い実例を、反面教師的教材として出してみよう。

Mはある県立福祉事務所の、査察指導員に任命された。この職務は現業員（ケースワーカー）の直接の上司に当る。ところがMはケースワーカーの経験がない。社会福祉主事の資格はあるといっても、それは所謂3科目主事（厚生大臣の指定する3科目以上を大学で履修したもの——社会福祉事業法に規程がある）でしかなく、実力を伴っていない。

ここでMの選ぶ道は、2つある。1つは仕事の合い間に、しっかりソーシャルワークの勉強をすること。日常業務は対人関係が多いから、ベテランの部下ワーカーの手にあまる対人関係の相談に応じ、人間的に対応し援助することで事足りる。

Mは別の道を選んだ。勉強と努力を怠って、ひたすらワーカーたちの機嫌をとり、上司と仲良くして、仕事にかこつけて本庁に出向くたびに、自分を売りこむことを忘れなかった。彼は文字通り大過なく（悪い言葉の見本みたいなものだが）2年か3年を査察指導員として過し、来るべき異動期に本庁復帰を果たすことを考えた。そして事は望み通りに運んだ。

ラインとスタッフの評価が行政では逆転し間違っている、要は1人ひとりの心がけ次第である。幾多のすばらしいワーカー友人の例が、それを物語っている。仕事を愛しうちこみ生き甲斐を見出すときに、仕事も伸びるし、よろこびも生れる。すべてのライン部門について、同じことが言える。

心がソレた不幸な例が、冒頭のヘンな川柳にあらわれている。

しかし問題は、もっと根深いところにあるかもしれない。行政には基本的にライン・スタッフの評価間違いが伏在し、それが時折行政マンの考え方をあやまらせるといっても、更に突っこんで考えれば、ことばが真実を写していないというところに行き当たりそうだ。ことばは、まことに両刃の剣で、便利で文化形成に欠かせないものだが、ありもしないものをさもあるように見せかける、虚偽作用があるところが恐ろしい。そこに根を張って、もろもろの不可解な問題が派生するようである。

## ことば——すばらしいトリック

前節で述べたことは、ある Chapel talk に簡単に要約することができる。“God cares less about our deeds than our attitude of mind.”<sup>49</sup>（神の思し召しは、人々の行いの方ではなく、その気持の方に向けられている——気持が大事）

気持が大事は分る、よさそうな行いだけよりも。しかし何れにしてもヒト社会のコミュニケーションは言葉で成り立っているから（そりゃ、動物なみに non-verbal の部分もあるけれど）、ことばの本質がことを左右する。不幸なことに、この便利すぎるコミュニケーション手段は、落とし穴をかかえていて、われわれを苦しめる。

“La présence du non être”（ないものがあるように見せかける——ことばの本質についてよく言われるこのことは、言い得て妙である。これを“非在の現前”などと妙に難しく訳す必要はない。英語に直せば、the presence which does not exist”なのだから、もっと素直に受けとめたいと思う。）

シュークリームと言えば、目の前においしそうなシュークリーム（余分なことだが、シューはフランス語でキャベツのことで、つまりこれはキャベツの形をしたお菓子ということになるらしい——栄養科の受講学生たちがわざわざ教えてくれた）が浮んでくる。現実にはありもしなくせに。

食べものだったら罪もないが、これが愛とか正義とか平和といった、抽象名詞になるとことは深刻である。

筆者の好きな言葉に色難（いろ、かたし）があるが（論語、爲政篇）、これも朱子の註によると、深愛と同意義になるようだ。この場合、愛と言わずに深愛（本当の愛）と表現しているところが面白く、つまりは愛に本当の愛と偽りの愛の双方があることを、古人も承知していたのであろう。

ことばがないものをさもあるように見せかけるところがある——そのマイナス部分を見つめると、すべては停止してしまいそうだ。

北九州いのちの電話・秋山聡平理事長から最近いただいた資料に、C. NOLLER という国際ライフラインの事務総長（メソヂストの牧師）の“Sermon - Knowing Christ is about Life and Love<sup>50</sup>” のコピーがあった。いい文が載っている。

“Our love is grounded in God’s love. So our love is to be sacrificial. Care for others - carless for selves.”

なんていい言葉だろう、と思う。“Care for others - carless for selves”——自分のことには少しもかまけずに、ひたすら他者を気づかう。まさに神に基づく愛とは、そのようなものであろう。

そう思いながら、現実のひどさに思わず考えてしまう。ヒトの弱さは、care for selves - careless for others になってしまい勝ちだと。そして Love grounded in God’s Love は、La présence du non être で、現実世界には存在しないのではないかと、つい不信の念にかられてしまう。

現実在即して極端な説は、リチャード・ドーキンス「利己的な遺伝子<sup>6)</sup>」に盛られている。すべて主役は遺伝子DNAであって、ヒトを含む生物は、DNAの仮の乗り物にすぎないという。進化もすべて生殖行動も、利己的な遺伝子の都合によって展開されるという。

紙数の関係で彼の興味深い所説の引用を省いて、先きに問題をすすめたい。

R.ドーキンスは、少なくともヒト社会について、大きな見落としをしている。最近サル学の進歩でサル社会においても、本能によらない生後学習行動がある（それにカルチャー、文化、遺伝外情報など、いろんなよび方がつけられているが）。ましてヒト社会では膨大な遺伝外情報をかかえ、発展させている。

さすがのDNAも、この分野には手が出せない。遺伝子の支配領域において彼は王者であり、生物は借りの乗り物として、乗り捨てられる運命にあるが、その手の届かない範囲も存在するのである。

結局結論的に見れば、ことばは魔ものであるけれど、selfish gene の言いなりにならないところが救いで、そうなると眞と偽が混在することになる。そのどちらを選ぶかは、われわれ1人ひとりの問題であるが、良い方向に向うためには、大敵エントロピー増大則に対抗して、かなりの努力を不断にしなければならぬ。しかしこの点については既に触れたことがある<sup>7)</sup>ので、ここでは他の問題提起をしたい。

老人という言い方を避けて高令者、ときには行き過ぎて年長者（これは senior、つまり年上の人というこでしかないのに）、婦人よりも女性、精神薄弱を知的障害…いろいろあるが、言葉の言い換えも結構なことながら、問題はやはり発言する側の心の持ち様が大切であろう。この小稿では僅かの枚

数でも心の差別にかかわる2つのこと、未開放部落問題と人種問題を、ある角度から取り上げる。

### 津島町の3日間

古い過去なのに、それは昨日のここのようにリアルに回想される。昭和37年愛媛県の津島町で起きた事件だ。

結婚差別問題で、町全体が揺れていた。同対審も特別措置法もない時代、大さわぎとなるだけで、町全体がどうにもならなくなっていた。

当時30代半ばの筆者の許へ、町よりSOSが届いた。愛媛県庁社会福祉課長として頑張っていた時期である。直ちに駆けつけようとしたが、上司もスタッフも一様に反対した。行ったところでどうにもならない。これは行政の出る幕でもなかりうと。

このままでは血の雨が降る、再度の要請に反対を押し切り、バスを乗りついで津島町へ単身のりこんだ。

もう深夜だった。大勢町民が町公民館につめかけ、ただならぬ雰囲気である。町役場の協力を得て、直ちにグループ毎（婦人会、青年団、PTA等）反省討論会をもつことにした。町民の誰しも真剣で、3日3晩不眠不休の討論が続く。

未開放部落問題について、ようやく町民の間で正しい理解がめざめてきたと思う。最終的にそれぞれのグループ代表者と町幹部等を交えて、総括の会をもつ。

「これは一体何か。誰が責任者か」

席上一波乱もち上る。あわや振り出しの混乱に戻るかに見えた。発言し問題提起したのは解放同盟町支部の元役員、当時同盟組織は分裂して機能していなかった。

誰も答える者がいない。町長、町議会、教育委員会らも黙したままである。仕方がない。若僧の筆者が名乗り出た。この会の責任者は自分であると。それから年輩者の町幹部らの取りくみの不充分さを指摘し、きびしく糾弾して、正しい取りくみを求め、それぞれ答えてもらう。

理解と取りくみが一応進んだように思われた。大方の町民の納得も得て、総括の会を終え、町民一丸となった3日間の対論のしめくくりとした。

本学の専任教員となり社会福祉学を担当するようになって間もなく、招かれて愛媛県の講演会に講師として松山市に出向き、そこで津島町長に面会を

もとめられた。聞けば当時町助役をしていたという。その節はお世話になりましたとのしみじみした発言。尔来月日は経って、町をあげての正しい取りくみは続いているらしい。がんばってほしい、激励して別れた。

特措法の任務が終了しても、問題の完全解決への取りくみはこれからだと思ふ。言葉に注意して表面解決しているかに見えるが、まだ本当ではない。この前も80代の勉強家のある老婦人が、橋のない川第7部を読了したところだといひ、あたしはあの人たちに気付かずに不快な思いをさせていたのでは、と言ふ。まだ区別する心をもっている、この人にして。われわれすべての心が解放されるまで、終りはない。

### モンゴロイドの末裔<sup>えい</sup>

清流の傍らに、彼は佇<sup>たたず</sup>む。それは浅くゆるやかに流れる小川で、兩岸に疎林を伴っていた。佐波透のお好みの場所だった。

疎林が途中跡切れるあたりに、川を渡る飛び石がおかれていて、そこに目印のように深紅に紅葉した大木が一本そそりたっている。

カリフォルニア大学バークレー校の、キャンパスのただ中に、自然の小川が流れていた。日本からの研究留学生佐波にとって、それは心惹かれる不思議なスポットである。疎林には野生のリスが、のびやかに枝を走っている。

地元アメリカ人たちは、ここにあまり立寄らない。なぜだろう？彼は首をかし傾げる。カリフォルニアの大地が自然を豊かに保っているために、この小自然ぐらい珍しくもないのだろうか。真紅の大木は、どうして目を引かない。彼等は秋のことをフォール・シーズン（落葉の季節）と言うくらいだから、紅葉にも関心がある筈なのに。

風を切る音と、ドスンという地ひびきがすぐ近くでおこり、佐波はひとり想いを破られた。

目の前にグラマーな若い女性が立っていた。軽く息をはずませ、あらごめんなさい、人がいるとは思わなかったもので、とにっこり微笑んだ。飛石を越えて、一気に小川を飛びこえたものらしい。

見憶えのある相手のような気もするが、はっきり思い出せない。佐波透はどぎまぎして突っ立ったまま、対面する2人の間に沈黙がぎこちなく流れる。声がでなかった彼だが、その不自然さを破りたくて、思いがけないことを口

にしてしまう。

「ぼく、ぼんやり突っただっていただけだから・・・あの、よかったらお茶でも一緒に」とたんに相手は吹き出し、身をよじて苦しそうに笑うのだ。呆っ気にとられる彼の前で、やがて彼女は体をおこし、わびるのだった。「失礼しました。あまり思いがけなかったもので。だってあなた方日本の留学生の方ったら、殆んど地元の人間にうちとけて話さないものだから」

それがミタリ・ギル、28歳、パークレー校社会問題研究所助手と、佐波透、37歳、同大人類学教室研究生との、出会いだった。

「いま何て言いました？」

キッとになって、ミタリが相手を見据えた。喫茶店アレフで、2人は窓際のテーブルに向い合っていた。お茶に誘ったものの土地不案内の佐波に、ミタリがこの店ならと教えたのだった。パークレー校の東門を出て少し横道に入るところに、そのシックなコーヒーショップがある。

ミタリから詰問するように問い返されて、彼はたじろいた。何か気にさわることを言ったのだろうか。

席につくなりミタリが言ったのだ。あたしインディアン系なの、と。ミタリというファーストネームと、同じ皮膚の色から、それは彼も察しがついたが、彼もすぐに答えた。

「それじゃあ、ぼくたちも同じモンゴロイド。お互い同胞じゃないか」

それに対してミタリが反撥するように問い返し、彼も同じ言葉をくり返したのだった。

「はじめてだわ、そんなこと言われたのは」

ミタリが呟くように言い、じっと佐波を見つめる。

はじめてだって？彼は心中に思う。いつも思っていることなのに。

「日本の方は、あたしがインディアン系と名乗ると、少し見下したような態度をとられることが多いから」

無知と偏見、申しわけないことと佐波はミタリの言葉に反省し、ついで遙か遠い時代に思いを馳せる。

ヴェルム氷期は、1万年前に終わったばかりだ。氷河期にはかのベーリング海峡が干上って、ベーリンジア大陸があらわれる。1万数千年前モンゴロイドがそのベーリンジアを踏みしめ、新大陸へ移住した。先史モンゴロイドといわれる彼等は、多分大型哺乳類を追って、氷の回廊をぬけ、すばらしい大

地に到達したのだ。

定住と移住をくり返ししながら、彼等は1千年の間に新大陸の南端にまで達した。

「モンゴロイドの子孫同志が、こうやって再会するのも、なにかの縁でしょうね」

佐波が思わず言えば、ミタリはにっこりして、あなたを母に会わせたい、母はいまでもマツオイ部族の伝統に従って生きているの、という。

「ほほう。でもミタリ、あなたは現代娘らしい生き方を選んだのでは」

「ええ、そうですけど。母のこと好きだし、尊敬しています」

彼女は明るく答えた。

アレフは落ち着いた雰囲気、ミタリのすすめたモカマタリは、たしかにこくがあっておいしい。彼も初対面の相手に、つい口がなめらかになる。

「モンゴロイド、コーカソイド、ニグロイドと人種の区別を言いたてたところで」

佐波が遠くを見る眼差しになった。

「それぞれの地域に、生理的に適応しただけのこと。DNA上は差異のない同じホモ・サピエンス。皮膚の色の違いぐらいで偏見をもつなんて、およそこっけいですよ」

「残念なことに」

ミタリがうなずきながら、つけ加える。

「ここアメリカは人種のるつぼでしょう。言葉だけはみんな気をつけるようになって、アフリカ系・日系・中国系・インディアン系・ヨーロッパ系アメリカ市民と言うのね」

「言葉だけでは、本心が変わらない？」

佐波が言葉を足した。

「残念ながら、そうね。日本ではどうです？」

ミタリの問いかけに、彼は軽い溜息をもらした。「やはりね」

2人はそのテーマについて、なお話しこむのだった。(この項、未完)

## エピローグ

好きな作家池澤夏樹が、面白い表現をしている。“ドストエフスキーは、

神なき革命論は必ず破綻するということを証明するために「悪霊」を書いた<sup>8)</sup>。”

神なき革命論は必ず破綻する、それをもじって言えば、気持のこもらないソーシャルワークは必ず破綻する、ということになろうか。

ソーシャルワークを座標であらわせば、横軸に知識と経験をミックスしたものをとり、縦軸に気持の持ち様をとってあらわすことができるだろう。ソッポを向いた気持であれば、マイナスの座標となる。

どのようにすれば、気持の座標軸を高めることができるだろうか。この小稿では、それを、妨げるマイナス要因として、ラインとスタッフの誤まった(行政部門の)見方を指摘した。もう一つのものとして、ことばの両面性、ウソを真実らしく見せかける危険性を挙げた。

どちらも、問題を指摘することはできても、改善の道は遙かに遠い。

ラインを重視しスタッフを過大に評価しないようにしよう、筆者の行政体験を通じて一貫して具体的に主張し自らは実践してきたところなのだが、その考え方はいつまでもマイナーに止まっていた。

ヒト社会を研究するに当って最大のアポリアは、社会の二重構造である。表と裏、その違いの大きさ、結局それはことばの二重性に基づくものだった。

この問題にも、早期の解は見出せない。むしろ“久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里は捨てがたく、いまだ生れざる安養の浄土は恋しからずさふらふこそ、まことによくよく煩悩の興盛にさふらふにこそ”（歎異抄）——ここから久遠劫里という言葉は筆者は創り出した——のように、selfishな煩悩の身と思い定めて無心に帰するところに、解がもとめられるのであろうか。

分からない。あなたはどうか考えます？

註

- (1)日本有職婦人クラブ全国連合会北九州クラブ（略称BPW 北九州クラブ）は1988年結成、現在会員38名。月例会の他、働く女性に関するアンケートや講演会を行っている。
- (2)1993年11月6日、北九州市商工貿易会館。  
BPWはBUSINESS AND PROFESSIONAL WOMENの略で、全国に28クラブ、会員800人。国際有職婦人クラブは1930年設立、加盟99ヶ国、総会員27万人。働く女性の組織であるが、まだよく知られていないので、紹介を加えた。
- (3)“ラインとスタッフ”の中の“行政では逆立ち？”（たなべ「<sup>いろかたし</sup>色難——生きている福祉，1983年増改行版、相川書房，P.97～P.100）参照。実例を交え理論的な解明を計ったつもりである。
- (4)好きな句なので、前にも引用したことがある。数年前本学のチャペルトークで聞いた一節である。その人、アメリカ人男性教師の名は残念なことに、忘れてしまった。彼はゆっくりしゃべってくれたが、この部分が印象に深く、あとで他からの引用かとたしかめたところ、引用ではない、自分のことばだとの回答だった。
- (5)1989年、アジア太平洋カウンセリング会議（釜山市）のときのもの
- (6)原著はRichard Dawkins, THE SELFISH GENE, 1976, 訳書は日高敏隆ほか訳「利己的な遺伝子」紀国屋書店, 1991
- (7)たなべ「ヒト社会」, 梅光女学院大学論集第26号, 平成5年3月
- (8)池澤夏樹「楽しい終末」1993年7月, 文芸春秋社, P.262